

「ブータン・医療ミッション」： 地球研、京大プログラム、AACK に関する私的感懐

松林公蔵

京大東南アジア研究所

はじめに

2009 年から、ふたたびブータンにかかわるようになった。私にとってのブータンは、1985 年秋、堀了平教授を隊長とする京都大学山岳部ブータン・マサコン峰登山隊に参加してから実に 25 年ぶりのことである。85 年のマサコン峰登山では、登山隊員の健康に責任をもつ隊付き医師兼登攀隊員としての参加であり、途中のキャラバンで十数名の一般住民の「医療相談」には応じたものの、ブータン住民の健康や疾病全般についてはあまり触れる機会がなかった。1979 年に初めて行ったカラコルムのキャラバンでは、医師というとキャンプに着くたびに多くの施療希望者に囲まれて息つく暇がなかったものだったが、それから 6 年後の 1985 年でも、ブータンは伝統的な価値観なのか、施療の求めも含めて、あまり「乞う」という文化に接しなかった。

しかし 2009 年以降は、老年フィールド医学の臨床研究者としてふたたびブータンを訪れるようになった。その過程で、京都大学学士山岳会 (Academic Alpine Club of Kyoto: AACK) とブータンとの長い歴史を改めて実感し、先達たちの数多くの人脈と遺産に裨益したこと限りない。

本稿ではそのゆくたてを記してみたい。

地球研「高所プロジェクト」

1985 年の春のナムナニ、秋のブータン・マサコン峰登山と一年間のヒマラヤ三昧を終えて京都大学老年科・神経内科に戻った私は、教授から「十分山は楽しんだらうし学位研究も終了したのだから、来年からは高知に行つて欲しい」と高知医大老年病科へ赴任を命ぜられた。あとから聞くと、同級の数名が高知赴任に難色を示したらしい。

1 年間、ヒマラヤに行かせてもらった恩がある私にとっては否応もなく、86 年 4 月に助手として高知に赴任した。そして、私と同時に老年病科に研修医として入局してきたのが奥宮清人君である。奥宮

は、私の専門である神経内科・老年病学を専攻し、高知県で「フィールド医学」をたちあげ数々の海外医学調査をともにする後輩となった。2004 年に奥宮は、上賀茂にある総合地球環境学研究所（以下、地球研と略）に准教授のポストを得た。医学部を出て 15 年ほど臨床医学を修めた後に、教室員もいない学際融合の研究所に好んでゆく医師は少ない。

そういう意味でも奥宮は私の後継で、やがて「人の生老病死と高所環境－“高地文明”における医学生理・生態・文化的適応」というプロジェクトをリーダーとして立ち上げた。進化・生態・文化の異なる「高地」住民の疾病・老化・生活実態に関する実証的な知見を比較することによって、高地環境に対する生物学的な適応と文化的適応の相互連関を考察し、「人の体に刻み込まれた“環境”」という新たな概念を提示する、という壮大なプロジェクトである。

この研究プロジェクトの発足以来、多くの AACK 会員研究者がコアメンバーとして参加している。住民の住む「高所」の対象地域としては、中国青海省、インド・ラダーク、インド・アルナーチャル・プラデッシュが中心であったが、ブータンをぜひともやりたいという若き研究員があらわれた。それが、坂本龍太君である。

坂本は、東北大学医学部の出身で、数年間、東京で救急医療の研修にたずさわったのち、京都大学の公衆衛生学教室に大学院生として入学してきた。いつのまにか、私たちの「フィールド医学ゼミ」に参加するようになり、ニューギニア、タイ・コンケン地域などのフィールド医学調査にも参加した。大学院を卒業してからは、医師としては薄給の地球研の研究員を志望し、奥宮の右腕として青海省、ラダーク、アルナーチャルなどの高所フィールド医学研究に従事した。その坂本が、「実はブータンは子どもの時代からの憧れの国であり、もしも医師として現地に長期滞在する高地とすれば、ぜひブータンに行きたい」と希望してき

た。2008年の夏、青海省調査のころと記憶している。

この坂本の切望が、私を25年ぶりにふたたびブータンにかかわらせる契機となった。

栗田・坂本の対ブータン折衝

ひとりの若手医師が希望したからといって、責任をもって医師を長期にわたってブータンに送り込み診療を実践する交渉はさほど簡単ではない。私は、京都大学マサコン隊の副隊長でありブータンに太い人脈をもつ民博名誉教授・栗田靖之氏に相談した。将来のブータン未踏峰の登山をめざして一時期ブータンにかかわったAACKの先達が多いが、一生ブータンにかかわったAACK会員は栗田氏を置いて他にいない。

栗田氏は、若き坂本医師の希望を諒とし、ひとはだもふたはだもぬいでくださった。2008年11月に来日したLyonpo Dago Tsering（当時ブータン王国駐インド大使）に坂本を紹介してくださった。2009年5月には栗田氏に連れられて、坂本・奥宮・松林がブータン保健省を訪れた。私にとってブータンは、実に25年ぶりである。東のプムタンまで行き、途中の診療所や病院の見学もさせてもらった。帰国前に、再度、ブータン保健省のDorji Wangchuk 局長に坂本の希望を伝えて帰国した。

これで「いよいよブータンに行けるのだ」と希望を新たにした坂本は、スケジュールや今後の抱負を何度もブータン保健省局長にメールしたが、ブータン保健省からの返答はいっこうに得られなかった。2009年8月、栗田・坂本連名でティンレー首相に書簡を送り、8月31日には来日した首相に栗田・坂本で会見することによって、事態は少し動き出した。11月には、坂本単身でブータンに赴き折衝、その後、何度もメールのやりとりが行われる。坂本のブータンへの赴任が正式に採択されるのは、「GNH委員会」という諮問機関の議決を経た2010年7月21日のことである。ブータン郡部地域で外国人が高齢者診療を行う、それも日本の研究機関が組織的に行うような性格のプロジェクトは、個人の外国人医師ボランティアとは異なり、ブータンでは、「GNH委員会」の承認を経て省議、閣議にかかるという。

交渉開始から1年以上の歳月を要した。1969年、桑原武夫教授を総隊長とするAACKブータン・

ミッションにおいて、先発の吉野熙道氏が、ブータン入国許可証を求めて3ヶ月インドに停滞したことを思い出す。

地球研と保健省との「交流協定」を10月に締結する省議が決定し、坂本は2010年9月15日から、事前準備のためカリンに赴任していった。

京大ブータン友好プログラム(KU-Bhutan)の胎動

上記のような2008年11月から2010年7月にわたる地球研とブータン保健省との協議と併行して、京大内部に別の動きが醸成されていた。

2010年3月頃、京大研究所長会議で「京都大学が一国を対象に行うミッション」について議論が行われたらしく、席上、霊長類研究所長の松沢哲郎が「ブータン」をその候補としてあげたことに始まる。1990年のAACKシシヤパンマ医学研究登山の後、松沢は教育学部と協働してブータンにかかわっていたので思い入れもあったのだろう。たまたま、「赤垣」で奥宮ととも今後ブータン計画の概要を協議している席に、研究所長会議の松沢から「京大ブータン・ミッション」の件で電話がはいってきた。その偶然にはとても驚いた。当時、「地球研ブータン医療計画」のことは松沢も知らないし、「京大ミッション」のことは私も知らなかった。「別床同夢」といった感じである。この松沢案は、京都大学の正式案件「京大ブータン友好プログラム(KU-Bhutan)」として採択され、2010年度より全学経費が措置されることになる。KU-Bhutanは、京都大学研究所・研究科群がそれぞれの専門的な立場から参加する全学的なとりくみであり、松沢が世話役となっている。2010年度には、KU-Bhutanから1-4次の訪問団が、2011年度にも5-8次隊の4訪問団がブータンに派遣された（<http://www.kyoto-bhutan.org/>）。

地球研高齢者医療ルートとKU-Bhutanが、独立にブータンで交わったことになる。そして、その系譜の源流は、1957年に始まるAACKとブータンとの長い歴史にさかのぼる。

AACKとブータンの歴史

1957年晩秋、時の第3代ブータン国王王妃ケサン・チョデン・ワンチュク皇后が非公式に来日されるという情報がAACK会員の本多勝一・朝

日新聞記者からAACK事務局にもたらされた。故・桑原武夫教授らは、将来のブータン未踏峰登山の可能性を視野に入れて、芦田譲治教授たちとともにただちに行動をおこした。王妃とその母・姉のブータン皇室一行に対して懇切な接遇と京都の街を案内したのが、京都大学とブータン王国の最初の出逢いである(写真1)。このえにしがきっかけとなり、1958年には植物生態学者のAACK会員・中尾佐助が、日本人としては初めてブータンに入国を果たし、「秘境ブータン」として結実した。中尾は高弟の西岡京治氏をブータンに送り、西岡はその後、滞在すること24年にわたってブータンの農業発展に尽力し、ダショーの尊号を受けた



写真1 1957年晩秋、京都を訪れたブータン王妃一行(前列右: ケサン・ワンチュク王妃、中央: 王妃母、左: 王妃姉、後列皇后、後列右から2人目: 故・桑原武夫教授)



写真2 地球研とブータン保健省とのMOU締結(2010年10月19日)(左: 奥宮清人、中央: 保健大臣、右: 立本成文・地球研所長)

ことはよく知られている。

その中尾以来、ブータンには、1969年の桑原武夫・松尾稔の調査隊が、そして、85年に京都大学マサコン峰初登頂が実現した。

ブータンには、その後も京都大学から連綿と学術調査隊が出ているが、近年は、横の繋がりが希薄で、縦糸となる歴史的経緯についても忘却されているくらいがあった。京都大学・ブータン友好プログラム」は、国の大小を超えてイコールパートナーとしての日本とブータン、それをつなぐ架け橋としての京都大学を意識して企画されたが、その源流はAACKとブータンとの関係に求めることができる。

地球研「高齢プロジェクト」と京大ブータン友好プログラムとの邂逅

2010年10月19日、立本成文・地球研所長と Lyonpo Zangley Dukpa・ブータン保健大臣が正式の学術交流協定をブータン保健省で調印した(写真2)。一方、同日、第一次京大・ブータン友好プログラム訪問団一行は Jigme Singye Wangchuck 第4代国王に謁見した。その際に、第4代国王から、「京都大学とブータンとの古くからの友好関係はよく承知している。ついては、京都大学隊が撮影した古い写真を提供していただけないであろうか。往時と近時のブータンの生態と生活ぶりをその写真によって比較検討してみたい。」との所望を受けた(写真3)。



写真3 Jigme Singye Wangchuck 第4代国王による京都大学・ブータン友好プログラムの一団の謁見(2010年10月19日)。

坂本、奥宮と私は、両訪問団が帰国ののち、坂本が長期滞在する東ブータンのカリンに赴き、ブータンで初めての地域高齢者健診を開始した。奥宮と私の帰国後も、坂本は半年間カリンに滞在して、地域住民の信頼を勝ち得た（写真4）。

2011年8月4日から13日まで、保健省局長とタシガン県知事一行が地球研「奥宮高所プロ」の招きで来日し、京都でシンポジウムをもった後、私たち老年医学グループがフィールドとしている高知県土佐町を訪れた。健診終了後の、土佐町幹部、土佐町老人クラブ、京都大学医学研究科院生、東京女子医大学生による合同懇親会が行われた。宴たけなわとなって老人クラブによる伝統踊りが披露され、地域老人のハーモニカ演奏、ケサン・



写真4 カリンで、高齢者健診補助の若者たちを教育する坂本医師。

カリン BHU 所長の絶唱も喝采を受けた。最後には、全員が高知県の鳴子を手に持ってよさこい踊りの行進に参加した。記念写真撮影時に、Dasho Lungten Dorji タシガン県知事がブータン一行を代表して謝辞を述べ、「感激の極みである。とくに、18歳の学生から90歳の老人まで、官・民・学が協働して実施する高齢者健診の中に、高齢者を尊敬する気持ち、また老人も若者に伝統を伝えたいという情熱が切々として感じ取られ、本プログラムは、GNHを標榜するブータンの精神と完全に一致する。ブータンは、本健診プログラムの方法を深く学びとり、また、今後の相互の交流を通じて、ブータン高齢者に還元したいと願っている」と語った。土佐町の地酒「桂月」の酔いも手伝ってか、知事の瞳は濡れていたようにさえみえる。

すべての挨拶・会話は、坂本医師のすばらしい同時通訳によって、ブータンと土佐町住民の心が一致した一タであった（写真5）。

おわりに

2011年10月15日、京大の一行は、ティンピーにおける現国王の結婚式に招待された。その一行は、松林、竹田、榊原というAACK会員にくわえて、「賓客」として故・桑原武夫教授のご子息文吉氏が同行され、結婚式の当日、69年隊の写真をもとに作成した「写真集」を、第三代王妃に桑原文吉氏の手ずから献上することができた（写真6）。



写真5 2011年8月9日、土佐町健診懇親会—18歳から90歳までの老若男女がブータン一行を歓迎した。



写真6 故・桑原武夫教授ご子息・文吉氏から「京大69年隊の写真集」を手渡されるケサン・チョデン・ワンチュク皇太后。

翌月 11 月 7－9 日にかけてモンガルで行われたブータン全国保健省会議に招待された坂本、奥宮、小林、松林は、坂本の高齢者ヘルスケア・ミッションが、ブータン保健省の第 11 次国家 5 年計画として採択されたことを確認し、保健省から今後、ブータン全土に普及させるための協力を依頼された。地球研の奥宮「高所プロジェクト」は、2012 年度を最後に多大な成果を得て終了するが、ブータン・ミッションは、京都大学が継承して続行する。

付記

2011 年 9 月 20 日、再度のカリン滞在を終えた坂本が、帰途偶然に、笹谷、寺本、安岡、栗田氏などから構成される AACK ブータン旅行団とウオンヂュ・ポダンで遭遇して、病気になられた野村高史氏を適切に診断し、ティンブー病院に搬送、以後 9 月 30 日まで懸命な看病にあたった。野村氏はティンブーからバンコク、バンコクから東京へと特別救急機で搬送され、いったん東京通信病院に入院後、12 月 19 日にはほぼ完治にて退院された。この救出過程における笹谷、栗田他 AACK 会員諸氏の連携、東京での受入れ後の野村夫人のケアに献身された島田喜代男、神山義明、田中健一の各氏によるチームワークには、AACK ゲマインシャフトの原点をみた思いであった。

なお、バンコクでは、AACK 会員・小澤良夫氏ご子息のタイ住友商事・小澤純史氏に、野村氏救出・搬送に献身的な努力をいただいた。記して深甚の感謝を申し上げたい。

(本稿は、2012 年 2 月発行の AACK ニューズレターを一部改稿したものである)

Summary

“Bhutan Medical Mission” by RIHN and KUBFP intermediated by AACK

Kozo Matsubayashi

Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

My personal concern in Bhutan, and a long history between Academic Alpine Club of Kyoto (AACK) and Bhutan was described. Since 2008, “High Altitude Project” lead by Okumiya K in Research Institute for Humanity and Nature (RIHN) aiming to investigate actual situation of health and happiness of community-dwelling elderly people living in Khalin in Bhutan and to contribute to geriatric health policy in Bhutan has launched. Independently from the project of RIHN, Kyoto University Bhutan Friendship Program (KUBFP) aiming academic exchange and mutual contribution between Kyoto University and Bhutan has got off the ground. In 2009, the two projects intermediated by the passionate longing of Dr. Sakamoto R and efforts of AACK came across in Thimphu in Bhutan. At the Biennial Health Conference of Ministry of Health in Bhutan held in Mongar on 7-9th November 2011, the geriatric mission by RIHN and Kyoto University cooperated by Ministry of Health was formally approved on the 11th 5-year National Planning of The Kingdom of Bhutan.